

今年の応募作品は、一般の部は20編、ジュニアの部の高校生が1編、中学生が7編、残念ながら小学生の応募は無かった。甲乙つけがたい作品が多かったように思う。

#### 一般の部

一席に選ばれたのは「鳥兎（とりうさぎ）」ハンセン病の感染により小さいときに引き離された幼馴染の瑞代と和子。70年の時を経て二人は出会う。瑞代の作った陶紙を使った折り鶴の焼き物に和子が丁寧に織った鹿島錦があつらえられ、それぞれの感性が共鳴し、二人の人生の空白が埋められていく。瑞代は療養所の生活を、和子は平凡とは言えいろいろあった生活を語り合う。瑞代と和子の微妙な感情が、豊かな表現や描写で綴られていて、非常に読み応えがある作品に出来上がっている。

二席には「想いの欠片が満ちるまで」不動産屋を営んでいる父が亡くなり、就職のことで喧嘩をしたまま家を出ていた息子の創一は帰省する。父の机の上に残されたタイピンを手にすると座敷童子のレイが創一の前にあらわれるようになる。古いマンションの改築案をきっかけに、父が残したかったもの伝えたかったことなど、だんだんと分かってくる。座敷童子のレイが創一と父との距離を埋める役目をうまく果たしていて、父の想い、創一の想いがじわじわと心に染み入る暖かな作品だった。

三席は「漂泊」僕は<sup>36</sup>歳、ホテルに勤務、自分一人の時間を大切に

にしながら生活している。交際している恵美がいるが、まだ結婚は考えていない。もう一人の交際相手のきな子とは気楽な付き合いだ。自分の世界に閉じこもり、相手との深い関係を恐れている心情が、自分の力で泳いでいるのか流されているのかわからないクラゲの浮遊とうまく重なってみえてくる作品。

#### ジュニアの部中学生

一席には「僕たちの音」僕の前に黒川華が再び転校生として現れた。幼いとき彼女はピアノ僕がヴァイオリンで演奏した仲だったが、彼女は「神の子」と呼ばれ、僕の前から姿を消していた。彼女は「神の子」ゆえに傷ついていた。僕はそんな彼女をもう一度ピアノの前に、と望む。それは僕の為でもあった。演奏する楽しさ、喜び、彼女がだんだんと明るくなり、僕自身も成長していく姿がリズムのある文章で書かれていて、とても好感が持てた作品だった。

二席が「君のいないユニゾン」ユーフォニアムのソロパートを争う同級生の湊が転校することになり、演奏大会には凜が選ばれる。凜は複雑な気持ちだ。いつもそばにいて、口喧嘩ばかりしていた人が居なくなり、初めて気づく思いが、さわやかな文章から伝わってくる。

三席は「夏休みの夢」家だとお母さんから小言を言われ、外に出ると近所の人に怒られ、本屋ではマンガを立ち読みして店員に注意を受ける。イライラがピークに達し「誰もかも居無くなればいい」とつぶやく。それが現実になるのだが……。日常の大切さを身に染みて知り反省し感謝する。展開のおもしろさに引き込まれて読んだ。